

之綜緝辭采、序述之錯比文華、事出於沈思、義歸乎翰藻」の一文を載せる。小島憲之氏は（『上代日本文学与中国文学下 1519頁』）『文華秀麗集』の書名の考察の中で次のように述べる。

『文華秀麗集』の書名（名義）については、まづ「文華」の意を考えると、これは文章、広く云って文学の美しく華やかなこと（文章の「あや」を云ふ。文は、藻即ちあやのある水草にたとえられ〔第六篇第一章（一）「懷風藻」、また『文選』の「文若春華、思若湧泉、發言可詠、下筆成篇」（曹子建、王仲宣詠）のごとく、うるはしい華などにもたとえられる。

『漢語大詞典』では「文章的華采」と説明し、『後漢書』「班彪傳論」の「班彪以通儒之才、傾側危亂之間；敷文華以緯國典、守賤薄而無悶容」の用例および、劉得仁の「上翰林丁學士詩」の「官自文華重、恩因顧問生」の句を引く。

106 ○感 ……①心が動かされる②しみみ心に感じる。

○緒 ……いつまでも断ち切れない気持ち。

○牽 ……①続き、つなぐ②引つ張る、引き止める

107 ○慰志 ……心をなぐさめる。おもいをなぐさめる。『後漢書』「崔駰傳」に「崔篆、王莽時爲建新大尹、稱疾去、建武初、客居榮陽、臨終作賦以自悼、名曰慰志」の例がまた、『文心雕龍』「雜文」に「託古慰志、疎而有辯」の例が見える。

○馮衍 ……後漢の人。野王の孫。字は敬通。少くして奇才あり。年二十にして博く群書に通じた。王莽が廉丹を